

収監ベースの薬物治療プログラムは犯罪行為に対して 適度な効果がある



By Officer Bimblebury (Own work) [CC BY-SA 4.0]

収監ベースの薬物治療プログラムは犯罪行為や薬物使用を 低減する上でやや効果的である

本レビューの目的は何か？

このキャンベル系統的レビューでは、収監ベースの薬物治療の介入による出所後の再犯と薬物使用への効果について検討している。本レビューでは、74件の研究から得られた結果を要約している。そのうち65件の研究が米国で実施され、4件はカナダ、3件はオーストラリア、1件は台湾、1件は英国で行なわれた。

収監中の犯罪を行なった人たちは薬物乱用の問題を抱えていることが多い。彼らは効果的な治療を受けることがなければ、出所後に犯罪行為を継続する傾向がある。収監ベースの薬物治療プログラムは、再犯と薬物使用を減らす上でやや効果的である。効果はプログラムのデザインによって異なる。治療的コミュニティが最も効果的である。ブート・キャンプは効果的ではない。

レビュー研究では何を行なったのか？

すべての人ではないとしても、収監中の犯罪を行なった人たちのほとんどが薬物に依存している。薬物乱用に対して効果的な治療を受けないと、犯罪を行なった薬物依存の人たちの高い割合が出所後に犯罪を繰り返すことになるだろう。

収監ベースの薬物治療プログラムによって、治療と内省に集中するための十分な時間をかけて薬物との接触を制限するだけでなく、薬物乱用者—そうでなければ治療しなかったであろう人たちの多く—が治療に参加することを促進するために矯正施設が強制力を行行使することができる。

本レビューでは収監ベースの薬物治療プログラムが出所後の再犯と薬物使用にもたらす効果について検討している。

どのような研究が含まれているか？

本レビューに含まれる研究では、治療グループと比較グループを含む実験的あるいは2群の準実験的研究デザインを用いて、薬物乱用の問題を抱える収監中の参加者に対する収監ベースの薬物治療の介入について評価している。

収監ベースの薬物治療プログラムは、治療的コミュニティ(therapeutic communities, TCs)、グループ・カウンセリング、薬物犯罪を行なった人たちを対象としたブート・キャンプ、麻薬保守管理プログラム(narcotics maintenance programs)の4つの明確なタイプに分類された。



Air Force photo by Staff Sgt. Charles Rivezzo

本レビューはどれくらい最新のものか？

本レビューの著者らは2011年11月までに発行された研究を調査した。このキャンベル系統的レビューは2012年8月に発行された。

キャンベル共同計画Campbell Collaborationとは何か？

キャンベル共同計画Campbell Collaborationは任意かつ非営利の国際的研究ネットワークであり、系統的レビューを発行している。私たちは社会科学・行動科学におけるプログラムに関するエビデンスの質を要約、評価している。私たちの目的は、人々がよりよい選択とよりよい政策決定を行なうことを手助けすることである。

本要約について

本要約はエイダ・シュクヴドジーAda Chukwudozie とハワード・ホワイトHoward White（キャンベル共同計画Campbell Collaboration）が執筆し、Campbell Systematic Review 2012:18 The Effectiveness of Incarceration-Based Drug Treatment on Criminal Behaviour: A systematic review Ojmarrh Mitchell, David B. Wilson and Doris L. MacKenzie (DOI 10.4073/csr.2012:18)に基づいている。本要約はタニヤ・クリスチャンセンTanya Kristiansen（キャンベル共同計画Campbell Collaboration）が再デザインと編集を行った。本要約の作成に対してアメリカ研究所 American Institutes for Researchから受けた経済的支援に感謝してここに記す。



レビューには合計74件の独立した評価が含まれていた。65件の研究が米国で実施され、4件はカナダ、3件はオーストラリア、1件は台湾、1件は英国で行なわれた。これらの研究ではそれぞれのプログラムの類型について、方法論、サンプル、プログラムの特徴を比較している。

本レビューの主な結果は何か？

収監ベースの薬物治療プログラムは、犯罪行為と薬物使用を減少させる上でやや効果的である。こうしたプログラムによる全体的な平均の効果は、再犯や薬物の再使用を約15～17%減少させるということである。

効果はプログラムのデザインによって異なる。治療的コミュニティでは比較的一貫して小幅な減少がみられる。カウンセリング・プログラムでは再犯は減少するものの、薬物の再使用では効果はなく、麻薬保守管理プログラムでは薬物の再使用は大幅に減少したが再犯については効果がなく、ブート・キャンプには再犯と薬物の再使用の両方に対してごくわずかな効果しかなかった。

本レビューの結果が意味するところは何か？

本レビューで提示される主なエビデンスは、治療プログラムの効果は治療のタイプによって異なるということを示唆している。再犯と薬物使用を比較的一貫して減少させていることから、これらの結果が最も強く支持しているのは、治療的コミュニティの効果である。ブート・キャンプには再犯と薬物使用のどちらにも効果がない。

こうした結論は、評価数が限定されていることや一般的な方法論の弱さを考慮し、注意して読まれるべきである。

治療的コミュニティのプログラムは、再犯と薬物の再使用において小幅な減少を一貫して示した唯一のプログラムではあるが、その効果を過剰に評価した可能性のある公表バイアスのエビデンスがある。このようなあらゆる不十分な点を考慮し、こうしたタイプの介入による効果についてのさらなるエビデンスが求められている。